

博士論文研究基礎力審査の導入について

博士課程（前期）の修了要件に博士論文研究基礎力審査を加えることについて

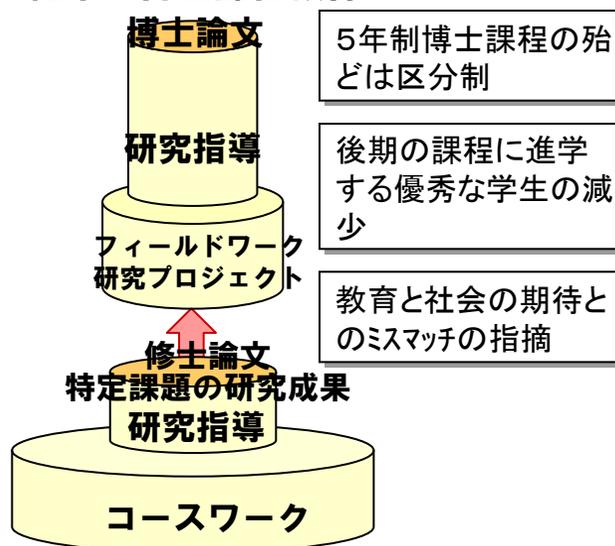
現状

- 我が国の博士課程は、前期・後期を区分する編制も、5年一貫の編制も取り得る。
- 博士課程は、博士論文の作成を集大成とする5年の課程であるが、現在、殆どが前期2年と後期3年に区分する区分制博士課程をとっており、修士課程として取り扱われる前期の課程については、修士課程と同様、修士論文又は特定課題の研究成果の審査と最終試験の合格を修了要件に課し、一定の研究成果の提出をもって修了を審査

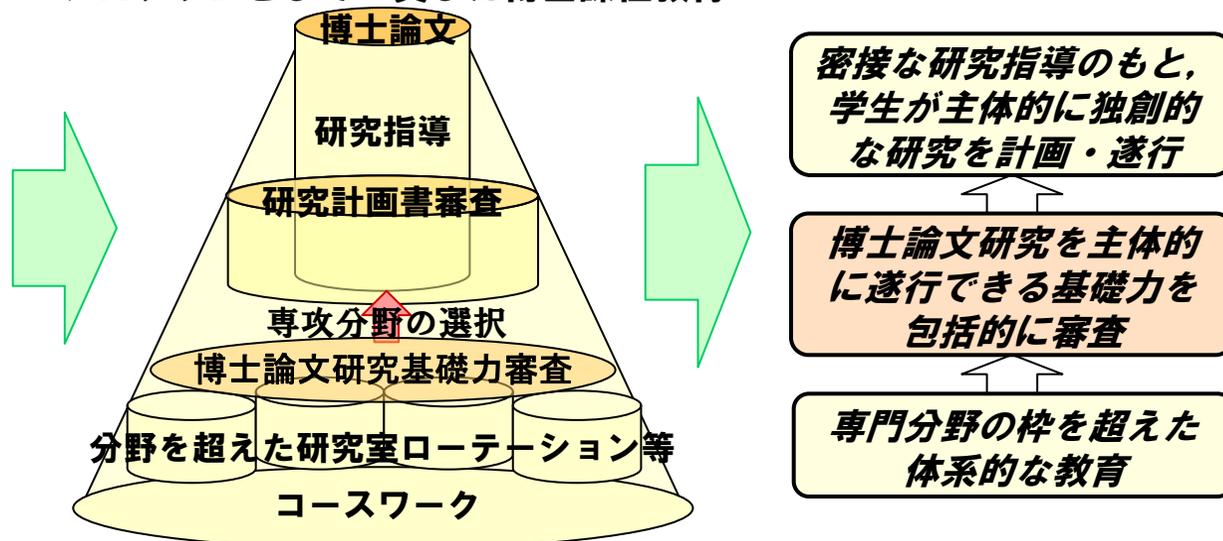
改正の趣旨

- グローバル化や知識基盤社会が進展し、国籍を問わず優れた人材の獲得競争が激化する中、優れた学生が博士課程に進学し、修了者が国内外の社会の様々な分野で活躍できるよう、博士課程教育の質の向上が重要
- 中央教育審議会は、専門分野の枠を超えた体系的な教育を経て、独創的な研究活動を遂行させ、質の保証された博士号を授与するプログラムとして一貫した博士課程教育の確立を提言
- そのためには、前期の課程を修了するまでに、広範なコースワーク等を通じ、専攻分野や関連分野の専門的知識の基礎が確実に修得され、博士論文研究を主体的に遂行するために必要な能力を養うことが重要であり、このような能力を包括的に審査する仕組みを導入することが必要
- 前記の博士論文研究に必要な基礎力の包括的な審査「博士論文研究基礎力審査」の合格をもって、前期の課程を修了し後期の課程に進学できるよう、規則を改正

従来の博士課程教育



プログラムとして一貫した博士課程教育



博士論文研究基礎力審査の仕組みと対象

仕組み

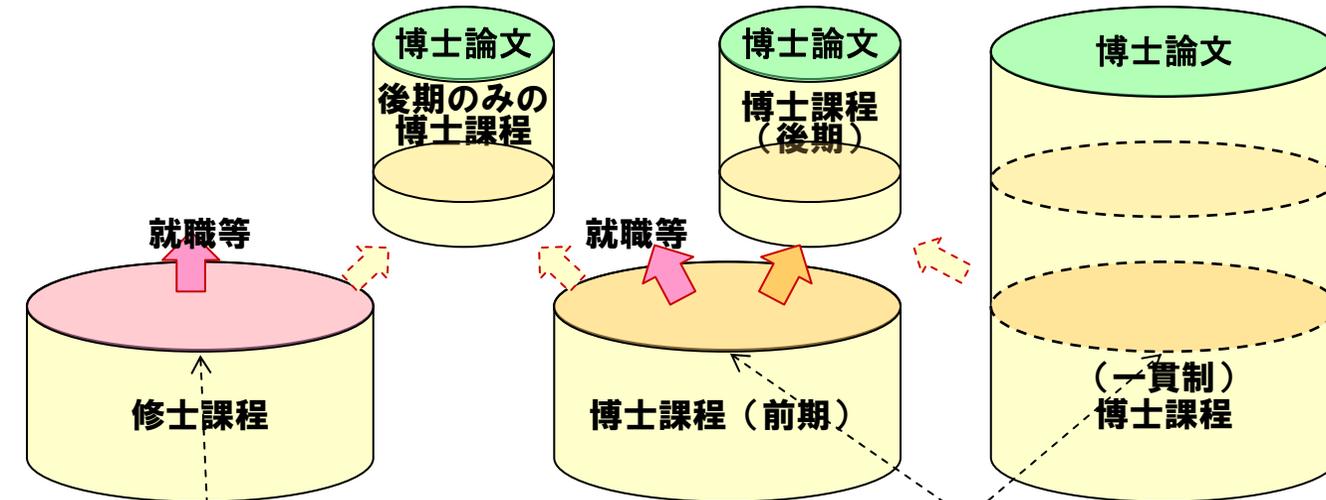
「博士論文研究基礎力審査」は、

- ①博士論文研究に係る分野及び幅広い関連分野の専門的知識及び能力を評価するための筆記による試験
 - ②当該研究に係る背景や意義の認識、研究推進能力等を評価する研究報告・口頭試問
- によって博士論文研究の主体的な遂行に必要な知識と能力を評価するもの。

適用対象

- 我が国においては、前期から後期の課程への接続に際し、他の大学院への進学、就職、実務経験を有する社会人の入学等、流動性があることを考慮し、
- ①「博士論文研究基礎力審査」を、修士論文又は特定課題の研究成果の審査と最終試験に代えて、博士課程(前期)の修了及び一貫制博士課程の修士号授与の要件とし、修士号を授与し後期の課程への入学資格を付与することができることとする。(一方、修士課程の修了要件は現行通りとする。)
- ②アメリカなどにおいてQualifying Examinationに合格した者の我が国の大学院への編入学の取扱いについては、個々の大学院の判断により後期の課程への入学資格が付与される現状に代え、Research Presentation & Defense又はSynopsisに相当するQualifying Examinationに合格した者で、修士の学位を有する者と同等以上と位置付けられる者に、後期の課程の入学資格を付与することとする。

博士論文研究基礎力審査の適用イメージ



修士論文
特定課題の研究成果 } ⇒ 審査及び最終試験

● 修士論文
特定課題の研究成果 } ⇒ 審査及び最終試験
● 博士論文研究基礎力審査

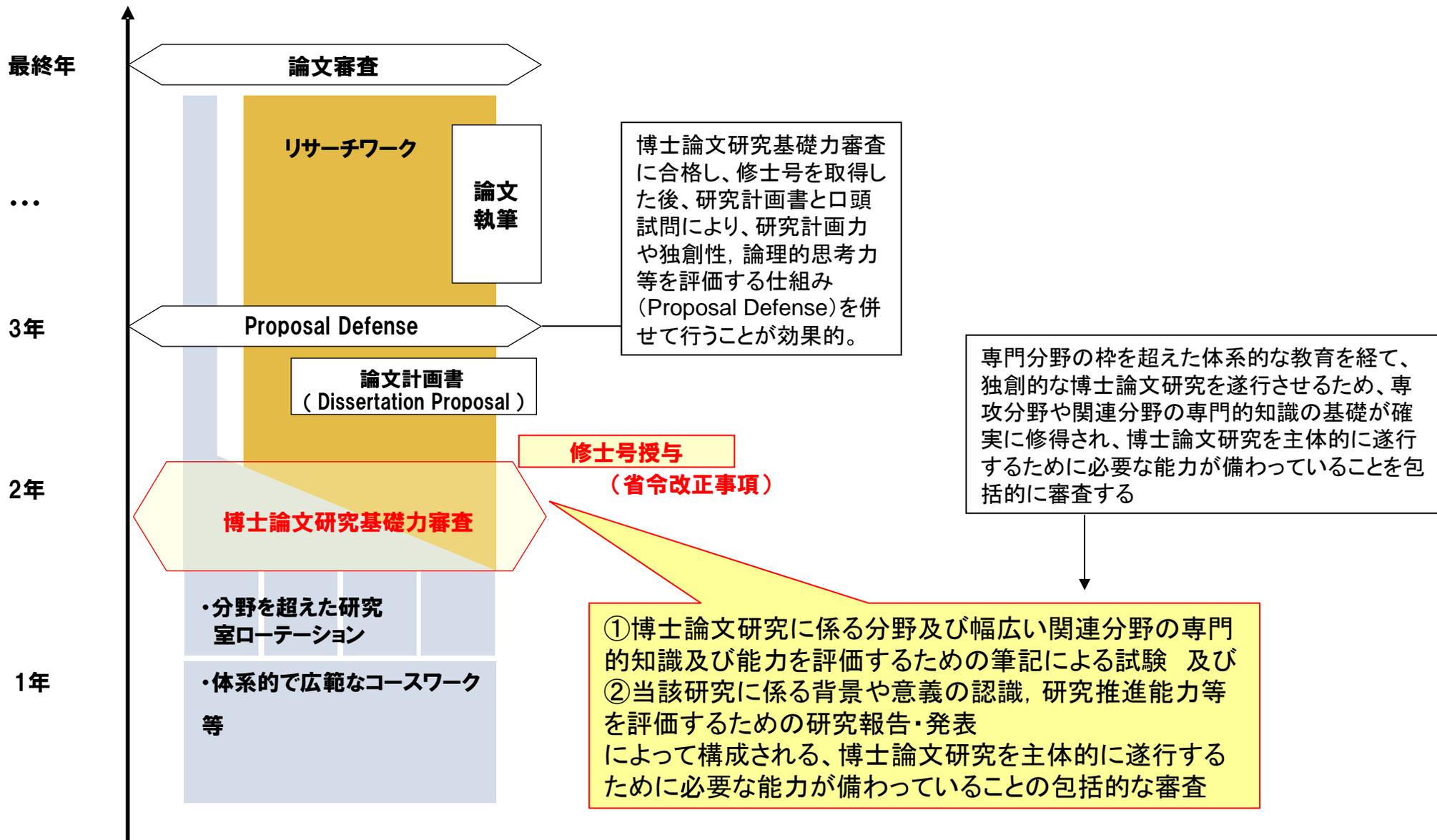
(参考) アメリカの Qualifying Examinationの類型

Research Proposal (Proposal Defense)
研究計画書と口頭試問により、研究計画力や
独創性、論理的思考力等を評価

Research Presentation & Defense
Synopsis
研究報告書と口頭試問により、論文研究
に必要な知識や研究推進能力等を評価

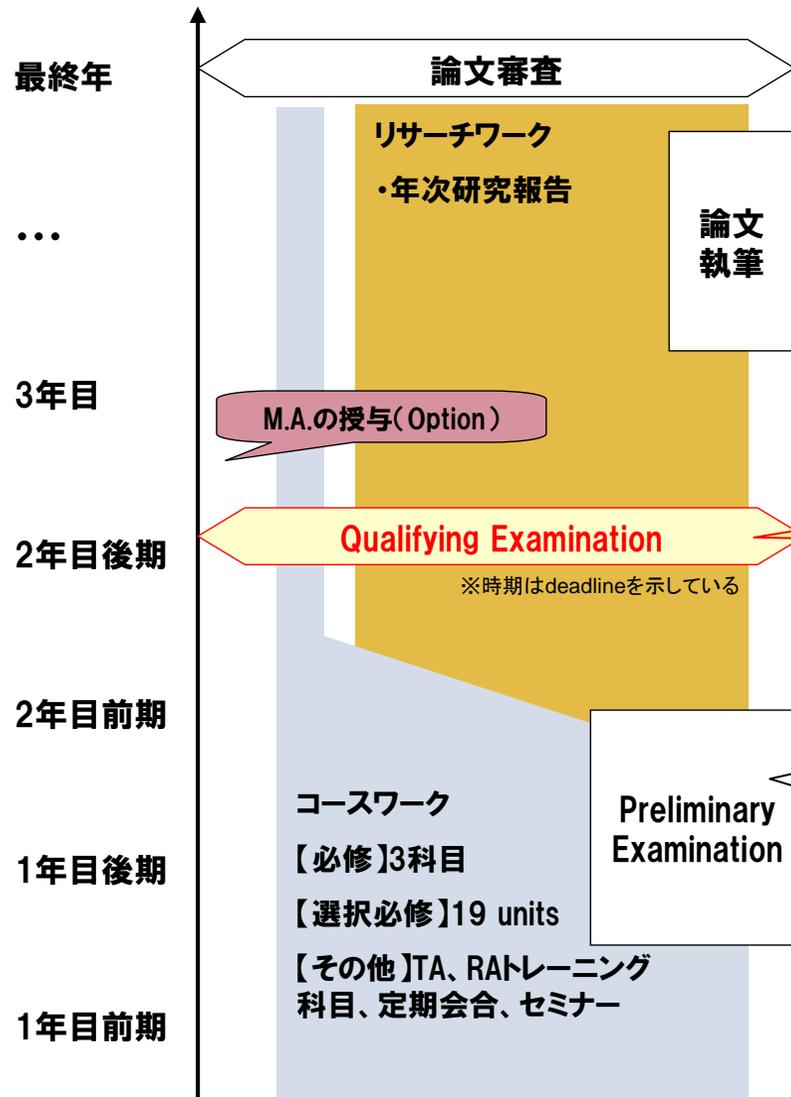
Cumulative Exam
Preliminary Exam / Comprehensive Exam
主として筆記試験により、幅広く専門分野
の知識を評価

博士論文研究基礎力審査の導入イメージ



Qualifying Examinationを導入する大学院の海外事例(米/UCバークレー)

UCバークレー – 物理 Ph.D.コース



基本的にPh.D.取得を目指した教育課程となっている。取得可能な学位としてはM.A.とPh.D.の2種類であるが、M.A.のみを取得目的とした学生の入学は認めていない。(Ph.D.取得の過程でM.A.取得が可能となっている。)

Preliminary Exam.が大きな関門を担っている。Ph.D. candidateとなるには、Preliminary Exam.に合格後、さらにQualifying Exam.に合格する必要がある。特にPreliminary Exam.は筆記・口頭それぞれが数回に別れて行われており、大きな関門となっている。

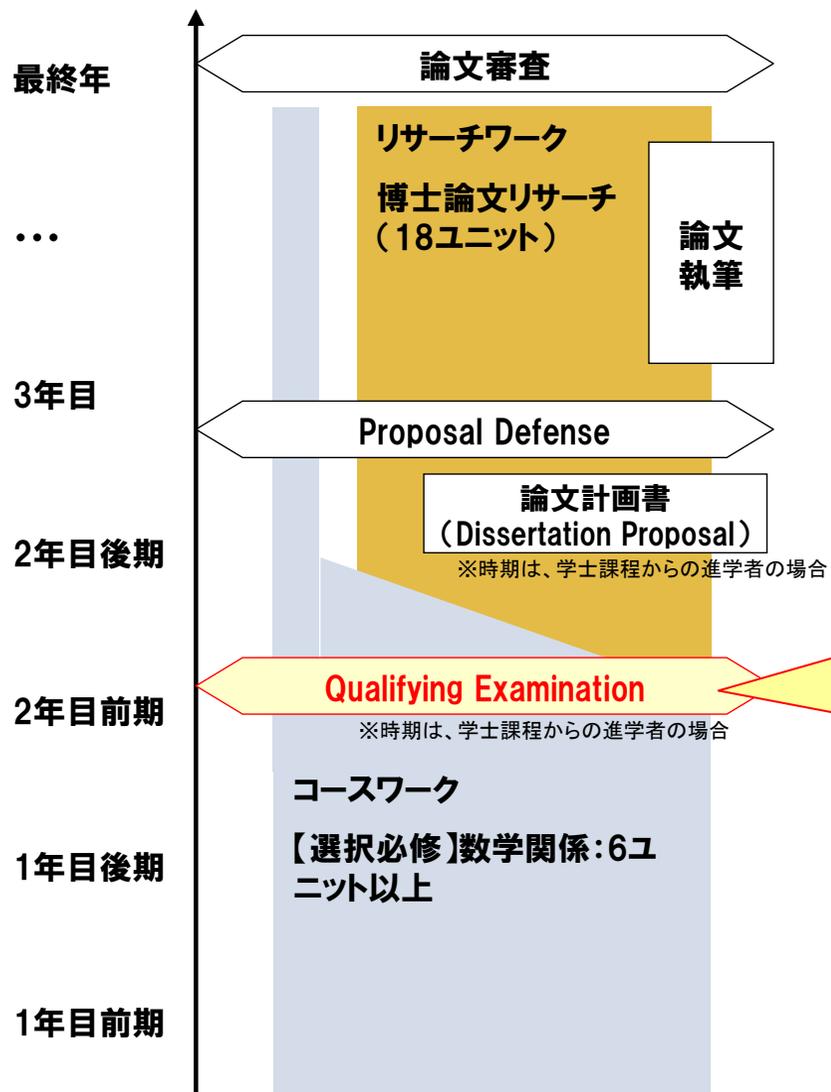
研究分野と研究領域に関する口述試験である。事前試験(Preliminary Exam.)合格後、4学期終了時までには合格する必要がある。

各学期開始時に行われ、学部レベルの知識が深く習得できているかを問う内容である。筆記と口述に分かれており、1年次に筆記試験のうち1種類の受験が必須である。1回で合格する確率は7割前後とされている。

- 筆記試験: Classical(力学・電磁気学・光学)、Quantum(量子力学)の2種類で各3時間を要する。
- 口述試験: 筆記試験合格後に受験可。筆記試験と同じくClassical、Quantumの2種類があり、説明能力より分析能力に主眼がおかれる。

Qualifying Examinationを導入する大学院の海外事例(米/メリーランド大学)

メリーランド大学 – 機械工学 Ph.D.コース



修士プログラムからの転入者に対し24単位までの単位転用を認める。また修士プログラムの成績優秀者で資格試験(Qualifying Examination)に合格すれば修士論文無しでPh.D.プログラムに移行できる。
資格試験の際には、あえてリサーチでの専門とは異なった内容の試験が対象となる。

テーマは、試験委員会が指定するもので、受験者のリサーチワークとは異なる分野である。どの分野に進むにも必要となる研究テーマ(Research Agenda)を見つけられる能力を身につけさせることをねらっている。
指定されたテーマ(学生には10日前に通知される)に関する文献学習を行い、指定されたフォーマットでのサマリーを口述試験の3日前までに提出する必要がある。口述試験では15分間のプレゼンテーションの後、質問(テーマに直接関係ない場合もあり)が行われる。